

あの吉田松陰も激賞した……
徳川史に対抗する西国戦国史

三 陰徳太平記 上下

限定三百部復刻(番号入)

勢を以て、海上を経て常島へ渡つて戦ふべき、只危きを捨て
全きを取つて、朔日の城攻に定むべしと申される間、問田、
青景を始め皆是の議に一同しけるこそ、陶滅亡するのみか、
大内家永く断絶すべき基なれ。

卷第二十七

毛利元就嚴島渡海附同所合戦事

弘治元年九月晦日、毛利右馬頭元就、昨日終日合戦の
評定し給ひ、今日夜に入りて宮島へ押し渡り、明日十月朔
日卯の刻の一戦と定められ、諸軍士悉く元就の本陣へ馳せ
來るべき由觸れられる程に、吾もくと參陣す、法度號令
委細に下知せられ、諸士退出せんとする所に、今暫く待つべ
しと宣ひ、元就重ねて陣中より立出で給ふ裝束を見れば、緋
緘の鎧に赤熊付けたる兜を著、相符には二つ巻締裨かけ給
ひ、腰に焼食袋、餅袋、米袋、三つ結付け、躍り出で給ひ、各
是を見候へ、此の若く三日の兵糧を畜へ、命を限りに戦はん
に、なご勝利を得ざるべき、但し三日と云ふは用心の爲にてこ
そあれ、合戦は唯半日が間に勝利たるべし、相詞は、誰そと問

は、勝つと答へよ、月と、よしとは敵の相詞也、又人足一人
も召具すべからず、力者の虚手の者共には、柵の木一本、繩
十尋充用意して持たすべし、諸軍勢の舟には箒焼くべから
ず、元就が本船の挑燈を表に乗るべしと宣ひける、此時諸
士の中に桂能登守元澄一人は、俄に疝氣起つて身心惱亂
せしかば、是非なく櫻尾の城へ歸りぬ、其由來を尋ぬるに、先
頃陶いま岩國永興寺に在陣しける比、元就、陶大軍を以
て大野の門山などを本陣として、櫻尾の城を攻めなば、門山
地嶮にして軍士多なれば、味方の寡を以て破り難く思ひ、如
何にもして敵を宮島へ呼び引き出し、狭き地に大軍陣どりな
ば、勢込積みて懸引不自由なるべき間、不意に之を撃つて
勝つべしと思ひ給ひ、桂元澄を召し出し、汝は、陶に一味し、
吾に對し逆意を企つべき由云ひ送り、如何にもして入道宮
島へ渡らんする謀を運し候へと宣ひければ、元澄畏り候とて、
頓て陶入道へ密かに云ひ送りけるは、元澄毛利譜代の老臣
たりと雖も、右馬頭近年佞人の讒口を信じ、元澄を奴兒婢
隸の如くに行迹申さるゝに依て、結恨山の如くに候ふ故、逆
意を企つべしとは存じながら、空しく年月を送り候、今幸ひ
入道殿元就退治のため御出馬にて候ふ間、元澄御方に參
り、忠戦を抽んで候べし、然らば先づ嚴島へ御渡り有つて、

徳川史に対抗する西国史

——『陰徳太平記』成立の謎が語る吉川家臣の反骨——

古川 薫



「戦国・織豊期の軍記。八一巻。岩国吉川家の家臣香川正矩の遺稿『陰徳記』を、二男景継が『太平記』にならって潤色し、一六九五年（元禄八）完成、一七二二年（正徳二）刊行。毛利氏の中国制覇を中心に西国の武家の興亡を描く。（通俗日本全史）」（岩波・日本史辞典）

多少の異同はあるにしても、これが日本史辞典類に見る『陰徳太平記』のおよその内容である。『陰徳記』を潤色したものが『陰徳太平記』としているが、潤色のほかに補足されていることも見逃せない。両書をくらべて点検してみると他の史料を調べて補足した部分かなり目立つからである。

辞典類その他の諸書で、これを通俗史料とするのは、軍記物語の範疇に入れて普通にそう呼ぶのだが、『将門記』『保元物語』『太平記』から『明徳記』『応仁記』までは戦争を主題とした叙事的な文芸作品と位置づけながらも、江戸初期に出た多くの軍記ものは「文芸的にも史料的にも価値は低い」ときめつける。したがって『陰徳太平記』などもそのように扱われがちだ。叙述に修飾や誇張があって、史実への信憑性がなく史証の価値がないとして歴史学の分野からは、あくまでも「通俗」の烙印が押されてしまっている。

しかし「延徳年間（一四八九―九二）より慶長年間（一五九六―一六一五）に至る百数十年間の関西諸家の興亡、諸将の事跡をしるしたものであるが、主力は、毛利氏が大内・尼子の諸家にかわって西日本に重きをなした、ということの記載におかれた。和漢混淆体の文体で、信用にあたいする史料にもとづいて書かれたもので、中国地方の歴史書として貴重である」（河出書房新社版『日本史大辞典』藤間生大）と、『陰徳太平記』の史料価値を積極的に評価する意見があることも知っておきたい。

『陰徳太平記』の修飾過剰な叙述が貶されることも少なくない。大げさな表現や頻出する漢籍からの故事引用などがペダンティックだとして嫌悪する人もいるのだが、軍記物の文体とはもともとそうした趣きのものだから、それが鼻につきはじめたら、もうどうしようもないだろう。私などは軍記物独特のレトリックを駆使した和漢混淆文の肌あいを楽しむくちである。

『陰徳太平記』は香川正矩の遺稿『陰徳記』を後の者が潤色したので修飾過多になったとされるのだが、必ずしもそうではない。一例を挙げてみよう。

『陰徳記』巻之三十五「豊前国門司之関合戦之事」は、永禄四年秋の関門海峡における毛利・大友両軍の「門司城合戦」を述べたくりである。これは約千字で比較的簡単に片付けられている。『陰徳太平記』の同じ章を見ると、大友史料や『九州治乱記』『吉田物語』『野史』などからの補足によって、文章の長さが『陰徳記』の二倍にふくらんでいる。

……香川左衛門尉、同左馬助、三吉式部大輔等、一万八千余騎を催さる、両将（注 毛利隆元・小早川隆景）雲州を打立ち、同九月下旬豊前へ押し渡り、門司の城へ入り、軍士を諸処に分ち、各持口を堅め、警固油断なく、海上に軍船七百余艘、赤間が関、壇の浦に繋並べたれば、水陸の旗旗赤白相映じ、風烟に相和して、其機敵を一口に吞却すべき勢ひ也ける故、借令大友九国を巻きて来る共、中々柵の一重も破るべしとは見えざりけり……。

登場する人名、地名も詳しくを増し、合戦場面の説明も描写が具体的にになっている。海峡を挟んで対峙する両軍の緊張感を伝えており、『陰徳記』の乾いた骨組みに臨場感を肉付けした迫力のある場面である。

軍記物としての『陰徳太平記』は、通説に耐える面白さをもっている。難字や人名にルビが振ってあるのもありがたい。毛利元就の初陣や厳島合戦、毛利・大友両氏が対決した関門海峡の門司城合戦、尼子氏との激闘から、山中鹿介と品川狼介の一騎討ちに至るまで、なつかしい場面も次々にあらわれる。まさに叙事詩の世界だ。戦国時代の個人ないしは小集団の猥雑な行動が「正史」によってどこまで解明され、時代のたしかな現実を再現し得るかは、はなはだ疑問である。

『陰徳太平記』には混沌の深みがある。時系列のみでなく歴史を面でとらえている。九州・中国にひろがる戦場を駆けめぐる錯雑した状況をたどって行くうち、何か巨大な播り鉢の縁を自分が移動しているかのような思いにとらわれる。それが軍記物の描き出す歴史の包括像というものはあるまいか。私にとって『陰徳太平記』は、愛読書であるばかりでなく、戦国の歴史小説など書くときには必携の参考図書となる。

ところで『陰徳太平記』が、江戸期に書かれながら、関ヶ原合戦の前でその筆を止めているのは、一種の謎といえべきであろう。毛利氏が内・尼子の諸家とかかわった時代を描くとすれば、そのタイム・スパンは妥当と言えなくもないが、戦国百年戦争の総決算ともいえるべき関ヶ原役を書かないのは故意

■吉田松陰も『陰徳太平記』を絶賛
「野山獄文稿」にある「従弟玉木彦介に与ふる書」の中で次のように述べています。

「おまえも十余歳。最近何を讀み何を修得しているのか。外国のことばかり詳しく、日本のことを知らないのは学者の悪い癖だ、おまえはまず国史を讀め、国史は近古から始めよ。上古は幽遠、中古は悠優で讀みにくいし子供向きでない。同じ近古でもわが藩の歴史から始めるのがよいだろう。それにはまず『陰徳太平記』を一読してはどうか。地名も人名もよくわかるし、文章も大変良く、読んで楽しく飽きることがない。『吉田物語』や『温故私記』に比べ、ぜひ読んでみよ。益も多い……」

（現代文に改題）
それにしても玉木彦介は当時まだ十四歳。昔の人はすこかった。



正徳二年板本太平記(マツノ書店蔵)

に避けているとしか思えない。

関ヶ原役は、毛利氏が徳川氏に騙されたという深刻な問題を残しており、毛利の側からそれを史書としてまとめるのは、必ず幕府の好まざるところである。そこで毛利元就の事跡だけはきちんとした歴史として編纂しておきたいと願ったにちがいないのだ。香川正矩が『陰徳記』を執筆した背景には、幕府初の官撰史書である『武徳大成記』編纂の動きが横たわっていると思われる。

『武徳大成記』は、貞享三年(一六八六)に成立した。これは徳川氏の創業記であり、初祖松平親氏から家康一生の事歴および幕府創業の事跡・武功をしるしたもの。後世の『徳川実記』にもかなりの嘘があるが、『武徳大成記』はもつとひどく、八代將軍吉宗が虚飾多しと非難したといういわくつきの史書である。

支配者に都合のよい歴史が編纂されるのは古今東西を問わない。木下順庵ら御用学者が幕府に命じられて『武徳大成記』編纂にとりかかり、家康が権力を手中にするまでの経緯を、きれいに叙述したことは容易に想像できる。

さてそこで『陰徳太平記』の刊行は、正徳二年(一七一二)だ。『武徳大成記』の成立から二十六年後である。つまり香川正矩は、徳川氏が編纂する官撰史書によって、毛利氏と西国の歴史が歪められることを懸念し、『陰徳太平記』の執筆を発起した。

関ヶ原役の密約で家康に煮え湯を飲まれた吉川家の家臣が『陰徳太平記』の編纂にあたったことにも重い意味がある。そして「諸将会盟の事」を終章としているのだが、それはいかにも不気味な言葉で終わっている。

「太閤公御遺言の旨ゆみこれあるに由りて、五人の大老、五人の奉行、少しも不信を存せず、(中略)秀頼幼君を衛護エウゴし給へば、乾坤泰和、風物順安にして、万民樂国ラクコクを謡ひ、山万歳ヤマバンザイを呼ぶとかや」

そこには「天下を詐取した」家康への憎しみが、痛烈な皮肉として大胆に述べられている。ことし紀元二〇〇〇年は、関ヶ原役からちょうど四百年目にあたる記念すべき年である。反骨の吉川家臣香川正矩の矚みにならって、そのことを暗喩するマツノ書店の『陰徳太平記』復刻に拍手を贈りたい。■

『陰徳太平記』復刻本の刊行によせて



士 博 学 士
教授 京都女子大学
笹川 祥 生

『陰徳太平記』は、香川宣阿の著すところ。宣阿(正保四年(一六四七)〜享保二十年(一七三五)の自序によれば、父正矩(慶長十八年(一六一三)〜万治三年(一六六〇)が、文明から慶長に至る間の、関西諸国における「軍事を摺撫(二拾い集めること)して」八十一巻とし、『陰徳記』と名付けた。しかし、正矩は「稿を脱せずして世を終」えた。すなわち、未完成のまま、四十八歳で世を去ったので、次男の宣阿が引き継ぎ、「長を取り短を捨て、繁を芟り略を補ひ、従ひて之を潤色」し、完成したのが『陰徳太平記』である。以上の記述を受け、諸事典類では、宣阿が正矩の草稿を潤色して完成した、という趣旨の紹介をすることが普通である。自序の記述が有る以上、多くの事典の執筆者が、それを尊重することも、また、やむを得ない。

しかしながら、私は、以前から述べているとおり(『正徳二年板本陰徳太平記』(昭和四十七年・臨川書店)の解題、『戦国軍記の研究』(平成十一年・和泉書院)など)、『陰徳記』と『陰徳太平記』は、それぞれ個別の作品と見るべきである、と思う。宣阿の主張にもかかわらず、である。

『陰徳記』が未完成作というべきものではなく、それ自体に完成された作品であることは、先年(平成八年)マツノ書店から、米原正義博士の校訂によって翻刻刊行された同書を熟読されれば、読者にも納得いただけるのではなからうか。もちろん、『陰徳太平記』が『陰徳記』から多くの材料を得ていることに疑いはない。しかし、それによって、単に『陰徳記』を補完した作品である、と考えることは、それぞれの作品の個性を、正當に理解していないが故の、一種の早とちりであると思う。

『陰徳太平記』と『陰徳記』を、異なった作品として扱うべき理由は、いくつもある。まず、両書の巻数は八十一巻で変わらない。したがって、宣阿が『陰徳記』の存在を、はっきりと念頭に置いていたことは理解できる。にもかかわらず、両書の間には記事の出入りが少なからず有り、宣阿は自分の構想に従い、かなり自由に、自分の作品として仕上げたといえよう。

付加されたのは、主に毛利氏の動向とは直接関係のない時期の、畿内・四国・九州各地方の出来事である。これらの記事が加わった結果、「毛利氏の記録」の域に留まっていた『陰徳記』に比べ、戦国時代における関西(四国・九州を含む)各地激動の様相が、読者の眼前に展開する。「略を補ひ」は、単に、正矩が見落とした事柄を適宜補う、という程度のことを意味した言葉ではなかった。

『陰徳太平記』について

■毛利元就をめぐる軍記は数々ありますが、その中で抜群の人気を誇る『陰徳太平記』を復刻します。最も読みやすい大正二年早稲田大学版「通俗日本全史」からの復刻です。叢書中でなぜかこの『陰徳太平記』だけ全国的に高値、品薄です。それだけ本書だけは戦後、何度か復刻されましたが、そのつどすぐに売り切れ、古書市場にもめったに出ません。この刊本は他と比べ活字が大きく、漢字にルビの多いのが特色です。■「通俗日本全史」という叢書名について。笹川先生の解説にもあるように「通俗」といってもこのばあい「低俗」あるいは「下品」を意味するものではなく、「わかりやすい表現を用いた」また本書のばあいさらに具体的に「漢文ではなく和文で読める」というほどの意味です。■三百部限定にしては自信の超安値なので、必ず予約で売り切れると思います。早めにご注文下さい。

一方、宣阿が除いた記事も少なくない。たとえば、元春に家督を譲った吉川興経は、元就の放った刺客に殺害された、と『陰徳記』に述べるが、『陰徳太平記』はこの記事は無い。また、元就が大内義隆と陶晴賢との抗争に際し、陶氏に一味したことを記す『陰徳記』の一章も『陰徳太平記』では削除される。宣阿のこうした処置は、「曲筆」などと、後世の論者に批判される原因となる。客観的には、そうした批判は尤もだといえよう。ただ、宣阿の気持ちを考えると、陽報のあるところ、陰徳が必ず存在したはずだ、ということであろう。宣阿のごとき、事実も論理に従属すべきだ、という執筆姿勢は、危険な要素を含むものであり、現在の読者は、戸惑いを感じるかもしれない。しかし、良質の史料も容易に閲覧できる現代にあつては、『陰徳太平記』の存在が、歴史の正しい理解に悪影響を与える心配も無い。また、『陰徳太平記』は、宣阿が自らの主義主張を展開しただけの、無味乾燥な作品ではない。宣阿の虚構の例を提示したが、これをもって全編捏造記事の集積だ、と考えることも、これまた誤解というべきである。史実に照らして誤りのない記述も多々ある。それどころか、戦国武士の心情、その行動の軌跡を、かなりの確に描き、同時期に著された他の軍書と比べ、戦国の雰囲気や伝えることにも成功している力作として、鑑賞に堪え得る作品といえよう。かつて松田修氏が「豊富な内容を持ち、はば広い性格を示している」（『国語国文』三十三巻九号・陰徳太平記と雨月物語）と評されたが、概ねの適評といえるであろう。

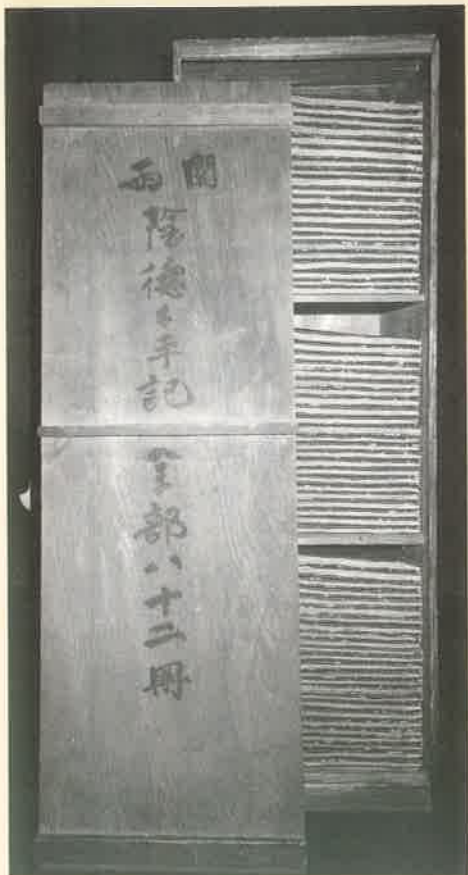
なお一言付け加えると、小瀬甫庵は、太田牛一作の『信長記』（いわゆる「信長公記」）に対し、あえて自著『信長記』について、「太田和泉守牛一輯録 小瀬甫庵道喜居士重撰」と位置付けた。しかし、現在、甫庵の作を、牛一作の『信長記』とは、別の個性を持つ作品とするのが、通常の評価である。甫庵が「重撰」と記しているにもかかわらず、である。『陰徳記』と『陰徳太平記』のように、原本と、それに若干の補遺を加えた関係と見える二作品が、実は別の個性を持つ作品であることは、近世軍書の世界では、よくある現象なのである。

緊急お知らせ、「索引」のこと
■「本書に索引があれば……」とは、研究者永年の夢でした。ところがその原稿があつたのです。
■本誌に「安西軍策」の推薦文を書いて頂いた島根女子短大長・藤岡大拙先生から、今回の「復刻速報」を見て只今電話あり「早稲田版陰徳太平記の「人名・地名・件名索引」の原稿を、自分たちのグループで作成している」とのことです。

■隣県なのに疎遠にしていたバチで、本書三百部の復刻版が完成した後、これを知った情けなさ……。でも道はあります。本書がよく売れたら、必ずこの「索引」を出版して、本書購買の皆様だけに、実費でお頒け致します。どうぞお楽しみに。

されることもなく、現在、いずれも入手困難な状況である（通俗本はその後複製されたことがある）。その後、昭和四十七年に影印本『正徳二年板本陰徳太平記』（付解題、松田修・笹川祥生共編・臨川書店）が刊行されたが、僅か百部だけの発行部数ということで、古書店でも、なかなか見かけることがない。昭和五十五年から五十九年にかけて、『正徳二年板本陰徳太平記』（米原正義博士の翻刻・解題・注による）全六冊が刊行されたが、大部の著作であり、手軽に購入というわけにもいかないのではなからうか。そういう意味では、今回の出版は、時宜に合った企画といえよう。ただ、読み易さを優先した結果、振り仮名など、原本に全く忠実とはいえない部分もあるのは、その時代の翻刻としてはやむを得ない。もちろん、通読に不都合という程でもない。

今回、マツノ書店から通俗日本全史本の復刻本が刊行されるということで、いささかの解説を試みた次第である。なお、「通俗」とは、「わかりやすい表現を用いた」という程度の意味で、通俗日本全史の場合、さらに具体的に「漢文ではなく、和文で書かれた」という意味である。決して、低俗あるいは下品を意味するわけではない。余談ながら、江戸期の「通俗」については、故中村幸彦先生の「通俗物雑談」（『中村幸彦著述集』第七巻・中央公論社刊）に詳しい。



正徳二年板本陰徳太平記（マツノ書店蔵）

■体 裁 A5判全二巻 一三五〇頁
クロス装製上製箱入

■定 価 二万五千元（〒660）

■特 価 二万円（〒サービス）

■特価締切 平成十二年七月末日

限定三百部（番号入）

▼今回は本誌の目録による古書のご注文品と一緒に発送すべく、すでに本書は完成、限定番号も記入し発送待ちの状態です。「特価期間中」でも、ご注文が三百部を超えたばあいどうにもなりません。今すぐご注文下さい。

▼「二点セット特価」は申込書に書いてあります。